

情報文化 学生瓦版

2015年10月21日
第69号

発行 情報文化学科
社主 松村 オードリ
編集長 藤井 エヴァグリーン
顧問 玉田 ロバーツ
神部 ビビアン
八木 トラボルタ
山口 クルーズ
学生 石橋 ジョヴォビッチ
海老原 トムクルーズ
超学生 古里 リチャード

千葉		20	15
東京		21	14
長崎		23	15
香川		22	13
静岡		22	14

開催 英語教育研究会

10月17日、江戸川大学で「第二回英語教育研究会」が開催された。様々な大学の先生方による、英語教育、日本語教育についてのお話を伺うことができた。 2面

江戸川大学
情報文化学科
学園祭
11月2日・3日
B棟6階で開催!



第2回

英語教育研究会!

国際コミュニケーションに挑戦しよう!

平成27年10月17日、江戸川大学駒木キャンパスにて、今年で2回目となる英語教育研究会が行われた。テーマは「日本人学生への英語教育と留学生への日本語教育をどのようにしたらよいのか」である。

基調講演では、東京大学教授の山本史郎先生が「日本人学生に英語をどう教えるか」翻訳を通してコミュニケーション指導のあり方」という題目で講演して下さった。まず、昔と今の英語教育の違いについてお話し下さった。昔の英語教育は、アメリカの文学作品の評論をテキストにし、それを学生に読ませて訳読させるというものであったそうだ。しかし、現在は1993年度のカリキュラム改革によって、英語教育が二極化しているとおっしゃっていた。一つは、英語の教科書に書かれて



東京大学教授 山本史郎先生



一橋大学教授 西谷まり先生

いる内容を訳して読むことを中心としていたもの、もう一つは、授業中は日本語を禁止し、英語だけで話して教育をするものである。さらには、明治時代から実際に使われていた英語の教科書を紹介して下さった。教科書に書かれている英語を訳してみると、「軍艦は鋼鉄でできていないか」や「君は酒を飲みたいのか」など書かれていて、今の時代では考えられない非常に興味深いものであった。また、訳読は言語力の育成になるが文法を理解しただけでは訳読したとは言えないそうだ。言葉の質やニュアンス、口調までも理解しないと訳読したとは言えない(葉毒)は毒にも薬にもなるとおっしゃっていた。

次に行われたワークショップでは、一橋大学教授の西谷まり先生が「留学生に日本語をどう教えるか?」という題目で講演して下さった。現在、世界の日本語学習者が減っている一方で、日本語教師が増えているという。この中で、「日本語パートナーズ」という取り組みが行われている。これは、日本語教育に興味がある人や日本語を教えるというものがある。そして、実際に外国人が使う日本語で「私はロシアから来たんですけど」「先生、私の証明書、まだできないんですけど」等の「〜んですけど」という表現に対し、何故違和感があるのか、どう直したら違和感がなくなるのか、違和感があることはわかるのだが、何故かと問われるとわからず頭を悩ませる人が多くいる。我々が普段無意識に理解している日本語の言い回しも、1から日本語を学習する外国人にとってはとても難しいのだという

を間違えた場合には、適切にアドバイスをしてあげることの大切さを知った。そのためにも私たち自身がいかに日本語を理解しておかなければいけないのだと実感した。最後は情報文化学科長の松村豊子先生による「江戸川大学における国際コミュニケーションに対する取り組み」というお話であった。情報文化学科の英語教育の例として、1年生が夏課題として取り組む英語版デジタル絵日記の紹介や情報文化学科のカリキュラムについてお話し下さった。また、松村先生が夏休み中に行かれた留学生の母国であるスリランカでの体験をお話し下さった。そして、東京学館船橋高等学校の小野木先生から、毎年生徒さんが英語の学習のまとめとして作成されている冊子が紹介された。先生方と高校生の地道な努力に感動した。今回、英語教育研究会でのお話を活かして、今後国際コミュニケーションに挑戦していきたい。

(海老原 トムクルーズ)

可能性を感じた! 英語教育研究会の巻



作: 藤井 エヴァグリーン

英声研語

(えいせいご)

しつとりと小雨が降りそそぐ中、江戸川大学にて、第二回英語教育研究会が開催された。日本人学生に英語を教えるというしやる先生、留学生に日本語を教えるという先生方が多く集まられ、国の壁を超えたコミュニケーション能力の育成についての研究会が開催された。英語教育の講義では日本でもこれまでどのように英語が教えられてきたか、直訳させることの良さや弊害(葉毒)について学ぶことができた。留学生に教える日本語の講義はまさに「目から鱗」であった。我々が、普段使っている日本語を実は完璧に正しいわけではないこと、うっかり勘違いして使っていたことが分かり、日本語の難しさを痛感することができた。一概に外国語は「学習」のためにあるのではない。あくまでもコミュニケーションの手段の一つなのだ。異文化や異国人を寛大に受け入れ、自らも外の世界へ積極的に飛び出すべきだ。そうしなければいつまでたっても「井の中の蛙」のままである。

(石橋 ジョヴォビッチ)

石橋が囲碁で勝った!
イチハシ大学
一橋大学



古里先生、山口先生の母校
秀才を生み出す地
東京大学